

小田原史談

第74号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

創立二十周年にあたり

会長 井上英一



我が小田原史談会が発
発足以来今年を以って
早や満二十年に相成り
ました。会員も現在六
百数十名の多数にのぼ

り、今後も益々発展をたどり、一般民衆へのため
社会につくすべく我等役員一同一致団結を以て
参りました、これ一重に皆々様の研究心と講師の
諸先生方のお蔭と存じ謹んで御礼申し上げます。

箱根を控えた我が小田原は、後ろに靈峰富士を
眺め、前に名高き相模灘、そして風光明媚、気候
温暖と実に最高の条件ぞろい、ここに生まれた我
々は人生の幸に恵まれたのです。

其上、小田原の史跡、物語りは多々ありまし
て、研究すればする程興味深い足跡ばかり、又こ
れからも歴史に残る人物も生まれると信じます。

会員の皆様方の尚一層のご支援を賜わり度くお

志せきとはふるいあ
しあとなめてみて
はじめてわかる
かんばしのあじ
(八十翁英一)

願ひ申し上げる次第で
ございます。

特別講演として

「文化財保護法と小田原」

河野 洋平 先生

「新しき中国を訪ねて」スライド付き

中井 一郎 先生

一、記念行事

委員長 加藤 誠夫

・五月 五日(月)

お城まつり記念講演

・五月 十八日(日)

国府津、前川方面

・六月二十二日(日)

東京豪徳寺、九品仏
など

・七月二十七日(日)

講演 講師

・八月二十四日(日)

石井富之助先生
鎌倉五山めぐり

・九月中

市内史跡めぐり

・十月或は十一月中

講演(講師未定)

一、記念出版

委員長 立木 望隆

「史談小田原 特集号」 一五八頁

会員頒価 八五〇円

一般頒価 一、三〇〇円

連絡先 小田原市南町二一三二一
沖山 敏子方

御祭り

広沢十五夜

御田植の祭の行事すげ笠の

早乙女たちの姿うるわし

註連飾の年の始めを神棚に
恵方にある幸運もまつらむ

しきたりて守り勢える揃着の
きやり高まり最高潮に

年毎に絢爛を競ふ雪まつりの

卓絶の伎倆に眼もうばわるる

平安の頃よりつゞきいと聞く

柘園祭の山車の列

(順不同、敬称略)

街道筋の助郷と其の変遷

加藤 誠夫

(3)

(五) 往還筋で経営した旅籠屋のこと

「旅籠」と書いて「はたご」と言うのだが、どうして出来た言葉でしょうか、此処で一ツ二ツ前から言われていたことを記して見ましよう。

江戸時代の初期の頃の旅人は、一日二合五勺の割合で、お米を持参して、宿屋に出すとか、或いは又自分で炊事の事をして歩いたのであって、其の時の炊事に必要な薪を支払ったのである。これを「木賃」とか「はたご」とか呼んでいたのだった。

「はたご」の意味としては、旅人が旅行に出掛けるのに必要な食料や雑品を入れて持って行く籠のことだ。これが転じて、一般旅籠を旅籠屋(はたごや)と云う言葉が起ったと言ふことである。

又別に、「はたご」とは宿屋のことを言い、現在の旅館のことで、旅の籠と書いて、泊(はく)かご、が「はたご」になったらしいとも言われている。宿屋には二種類があつて、宿屋である。其の他部落の外れには、立場茶屋等もあつて、主として馬子や人足等の休み場所として使われたり、旅人が小休止する為に造られた。此れ等の茶屋が、段々大きくなって料理屋に迄も発展した。

女中等を置いて、飲食と泊をさせる「食完旅籠」と百姓が農村の民家や旅人が泊める「百姓旅籠」とがあつた。百姓旅籠は「平(ひら)旅籠」とか「木賃宿」とも言われていて、現在の民宿等に相当する。

江戸時代でも中期以降から、旅は次第に軽便になつて、木賃支払いの宿賃ではなく、旅館で一切の宿費をすのようになったので、宿泊料も初期の安宿よりは、相当に高額になり、ついに幕末頃には、代金が急に増額される様になつた。

此の旅籠屋には、上・中・下の三等級になつていて、其の代金も賃金の多少の差額もあり、宿屋によつて其の値段は一定していなかつた。

明治の頃迄旅籠屋を営業して来たと言ふ

福田屋、富士屋、加藤屋、綿屋、江戸屋、武蔵屋、酒屋、角屋、亀屋、等が比較的には多くの人達の記憶に残っているが、元営業をしていたが今では全く忘れ去られていた家号もあるかも知れないが、それも時代の移り変りでいつまでもそのままではない。

尚江戸時代の通信機関としては、問屋場でそれ等の仕事をやつていて、其の組織を「飛脚」と言つていたが、其の業務に従事した脚夫のことでも飛脚と呼んでた。

小田原宿の御用物継所は本町にあつて、いつも飛脚が継飛脚の形式で公文書を送り、毎日通信業務にたづさわつていたのであつた。

此れとは別に、一般住民の通信の往來としては、各宿場に「町人請負制」による民間営業としての町飛脚があつて、此れ等の業務は一切問屋場で行ない、此処では一般文書の通信と、軽量の商品とを扱い、別に金飛脚といつて、金銀の輸送を扱っている業務もあつた。

名主役の家には、「御駕籠」があつて、昔の往來には、夫々の駕籠を用意していた。それらの主要街道には道中駕籠があつて、「立場(たてば)」に集つていた。たちの悪い雲助と言う道中人夫がかつていたり藩公等の参勤交替の乗物や領主の役人が名主所有の山駕籠を用いたのであつた。

「駕籠」とは竹や蓆を編んで籠を棒に取り付けて、後と前を二人一組で調子好くかついで行く乗り物の事である。

助郷制度と五街道の宿駅及び脇往還に於ける継立て等に関して、夫々の宿場の盛衰は、宿場のみの力ではどうにもならず、町人に課せられた課役の他に、隣接する村里の割当課役に依つて夫々の宿場の暮立てに成り立っていた事と、幕末に近付くに従つて多大な量の交通量と、大量の荷物の輸送には、定助郷の他加助郷の応援があり、尚更に夫々の余荷の輸送の確保の為に更に遠距離からの余荷助郷乃至増助郷迄増員する様な始末であつた。

(六) 宿場人足達の内から街道無宿を輩出

東海道・中仙道などには、武者専用の伝馬があつて、武士やその荷物を運送するが、これを次から次へ送る場合其の場所を伝馬宿問屋場といつたのである。今の鉄道の駅のようなものと考へてよい。宿民がこの労役に服するが原則である。幕府のきめた御定賃銭で安いのだから江戸その他の都會を追い出されて、街道をうろうろしている浮浪人に代行させたのが、問屋場の人足であり、人足のたまり役等は賃銭勘定という公称で、年中博奕を打つたことである。天保頃には、博奕打に彼等独特の仁義はなかつたのである。この人足は、雲助とは別である。街道を大名が通るとか荷物が

なり、蜜柑、煙草、茶等の生産等が次第に発達して来たのでした。

当時の農民の考えとして、それが精一パイの努力をして、日々の苦しい生活面を副業生産によつて切りぬけ様としたものであつた。

我が郷土の昔の人々が如何に涙ぐましい迄の日々を送り、必ずしも幸福だった時代ではなかつたのであることを知るのである。

頭へ紹介してやるから、遠くまで逃げられた。

この場合の逃げの者のあはさが、博奕打のいう急ぎの仁義であつて、もとは渡り職人のあはさつて、それが、更に街道の人足に利用され、街道から博奕打の挨拶に成つたのである。兇状持の相互扶助であつて、宿泊、食事、旅費もあたえる習慣があつた。

天保十二年、清水次郎長が人に重傷を負わせた逃げた時、旅費が無かつたので藤宿部屋頭片問の権を訪問して、初めて仁義を切つて、銭八百文を買つたということである。天保頃には、博奕打に彼等独特の仁義はなかつたのである。この人足は、雲助とは別である。街道を大名が通るとか荷物が

なり、蜜柑、煙草、茶等の生産等が次第に発達して来たのでした。

多いとかすると、人足や馬だけでは不足なので近郷の農民が助郷として強制的に労役に引出されるが、この時が人足との接触から博奕好になる。

戦国時代ならば、他人の土蔵も博奕に賭けられるが江戸時代になると、それは出来ない、平常貨幣が手にはいること、俗にいう日銭がはいることが条件となる町奴も人足部屋もこの様な条件の元に博奕が打てた農村では、収穫期以外に貨幣が常にはいるのは、養蚕

(七)村名主の立場と助郷制度

嘉永・安政の当時、小田原藩の仕事には、定助郷・加助郷の制度があって、宿場の継荷運搬や、雑役等があったので、金子村の間宮若三郎も名主として、其助郷の人足を送り出したりした。金子村の助郷の役が、嘉永三年から五ヶ年に亘った。若三郎善包(よしかね)は、領内に無事に人足等を送り出した為に、安政四年には此の件で表彰を受けた。其の時の文書には次の事が記してある。

安政四丁巳年三月十七日付にて
成年以来五ヶ年間、助郷方尽力不勘廉を以て、苗字差免、御紋附御上・下菅具

製糸、織物を副業とする上州、甲州の街道筋である。中仙道倉賀野から日光へ行く例、幣使街道の周辺から、国定忠次、大前田英五郎などを大物とする上州無宿が輩出したのである。

甲州街道筋からは黒駒ノ勝蔵などの甲州無宿が輩出したし、同じ貨幣的条件の下にある、清水港の次郎長下総九十九里浜の飯圃の助五郎、利根川岸の笹川繁蔵なども同様な条件の下に輩出したのであった。

御下賜。

此の文中戊年とは嘉永三庚戌年を指し、五ヶ月目の年は安政元甲寅であるから此の件に関して表彰を受けたのは、其の後三ヶ年の安政四丁巳年と言う事になる

又此の当時、河川が何時も氾濫していたので、足柄地方は至る所荒蕪地と化しながらの如き美田は甚だ少なかったから、名主若三郎善包は何とからして良田を増し度いと考えて、村民をばげまし、隣接の名主達と交渉もしたりして、酒匂川の水や河音川の水を工夫よく水田に導く為に大事業を起したのであった。

それは、神山村地先に新堰を設け、或は、隠道掘抜工事等も行なって、水利の便を計った。其の為、始に記した様な表彰があったのである。此の表彰状には、嘉永七甲寅年十一月十八日と記してあるが、嘉永七年と言う年はすでに無く、安政元甲寅年と改元されていたのである。金子村だけの事ではないが、此の時代の農村の経済状態は全く困窮なものだったので、上、下皆頭の痛い事で、其の為に考え出された対応策として「村方非常備金積立」を村一同申し合せて貯蓄を始め

したので、其の時はついに、五千兩余の大金を非常用の準備金として積み立てが出来た。此の美筆は当然お上に知れたので、奉行所を通して、表彰されたのである。古文重には、文久西年八月付にて、

村方非常備金積立之儀を發起し、去申暮に至るまで五千兩余補助候儀に依り、伴一代脇指差免、真岡木綿三反、御酒吸物下置。

此の文中、文久西年とあるのは、文久元辛酉年のこととて、去申暮、とは昨年の萬延元庚申年を指している

江戸時代も此の頃増々朝野の風雲急を告げ、正に明治維新の前夜とも言うべき

時で、幕府方も官軍方も命を惜しまず政治的な転換期の激動の中で、上、下を問はず、大活躍をした時で、それが地方の農民にも影響して、当時特に多忙を極めて駅馬宿場の仕事其の他雑役等、名主若三郎は率先協力し、助郷の御役目には萬端手落ちなき様心を配り、努力した。

其の為に、次の始き表彰を受けたのである。慶応元年の日付にて、次の通り。

両度御上洛御進発にて、助郷行届きたる廉に依り、伴一代袴着用を差免。

其の後慶応三年に又表彰があつて、此の頃はすでに若三郎は晩年に近付いている。

其の時の古文書を見ると慶応三丁卯年六月二十八日付にて。

器機御改には、菓大の御物入を忍察し、金子上納の廉を以て、帯刀差免。伴一代苗字差免、真岡木綿式反御酒吸物下置。

又其の年の九月にも名譽なる表彰を受けている。其の時の古文書には、慶応三丁卯年九月六日付にて次の様に書いてあった。

卯年以來度々之水災にて荒地多き所、小前之者に利解為致。不残自力開發致し

其上畑成田開発目論見、神山村和田崎より加水堰を始め、新堰路掘貫穴等、種々工夫致し、御收納相増し候儀に付、生涯の内、年々米式俵宛、御紋付、三ッ組御盃、白銀五枚(此金三兩老歩参朱、錢壹貫三百五十六文)下賜。

此の表状にある通り、当時の名主として、間宮若三郎善包は、其の生涯を御国の為に身を粉にしてつくし、文中、卯年と書き出したにもある通り、此の卯年の昔来とは、安政二乙卯年の昔よりとのことである。

この表彰は若三郎没年の五年前の事であつて、大變気の毒に思はれる事は、この翌年から明治元年となつてしまつたので、其の年の分のみ米二俵を頂戴したのみにして、明治四年に没せられる迄の四年間の晩年には誠に淋しい事だつたろうと心がいたむのである。

又或る日次の句を詠んで(御夫婦の句である) 捕る慾なくて見にけり 初螢 竹司居士 袖に散る雪もけしきや 若菜摘 花 郷女

旅の楽しさを増してくる駅弁の話

額田 喜代春

日本の国鉄は、明治五年五月七日品川―横浜間に一日二往復で仮りに、運輸好きな方でも、奥さんの作営業を創め、同年十月十四日には、新橋と横浜の両駅持つて、旅するわけにもいかない、まさか腹を食つて旅するわけにもいきませんか、いやでも時がくれば何か食べなければなりません。そこで手つとり早く、安い駅弁をと、いうことになつて、駅弁屋さんのご厄介になるのでありますが、全(四頁下段えつづく)

新田小史 (上)

柏木 次郎

われわれの研究会は発足当初は主として考古学を専門に研究し、蒐集した資料は断片数でも二万余数に達し、酒匂小学校及び酒匂中学校の各郷土史研究部に寄贈し社会科の教材として、又郷土を知る教材として大要役立って居ります。私共は単に歴史を学ぶものではなく、研究を通じ郷土に於ける情況の変化と人間関係の変化を知ろうとする思想より生まれ、発足したものである。

来年は創立十五周年を記念して、郷土史に於ける研究の成果と進展を期し、ここに綴るものである。

一 一新田附近

国鉄東海道線酒匂鉄橋右岸の土手を下った所に祖師堂がある。この祖師堂は日蓮大菩薩を崇める御堂で、毎年三月と八月に供養がこの御堂内で開かれている。三月は鬼子母神講で八月の供養は川流れの供養と称せられ、五日の日を供養日とされ地元有志の方々によって行はれている。川流れの供養は古今に於ける酒匂川洪

水の際の犠牲者の冥福を祈るものである。昔の行事はお堂内で持寄った米や野菜を焚き出し一日を過すものであったが、二、三年前からは出来た御馳走によって過し供養するに至った。又堂内には日蓮上人像(座像)を安置し、その横には三宝様を安置し、三月の供養日には鬼子母神の掛軸を出す。

この祖師堂は小田原の大久寺(大久保一族の菩提寺)の末寺とされている。又当御堂の建立の詳細は不明ではあるが碑文によると安政年間ではないかと思はれるが、年代や詳細は後の研究になるであらう。

又堂内にある石碑は飯沼勝五郎の墓と称せられてい

るが、飯沼勝五郎は、飯沼勝五郎で有名であるが、はたして本当の飯沼勝五郎の墓かどうかは疑問である。飯沼勝五郎の碑と称する石碑を次に記す。

安政二卯年二月
南無妙法蓮華經
水亡之諸積靈

題目講中建之
紹蓮院妙法無尼
受教院妙円無尼
受信院法遊無尼
隨喜院妙俗無尼
妙法淨智院蓮心無尼
清任院淨英居士
自窓院妙清無尼
慶岩院法喜無尼

明曆四丙戌年六月十五日
寛文五乙巳年四月二十一日
慶安元戊子年八月一日
寛永一九壬午年四月二十九日
延宝八庚申年九月十五日
寛永廿一甲申年十一月八日
正保二乙酉年五月十七日
寛永七庚辰年六月十八日

維時大正拾年三月十五日
南無三寶如來
南無釈迦牟尼仏
奉修一部 為宗祖生誕七百遠忌記念要塔他
奉修妙經 為宗祖生誕七百遠忌記念要塔他
当祈念員一同謹修
秋沢松健代

尚御堂内に残っている古文書類は数少なく次に記すのみである。

日蓮大菩薩
酒匂川橋梁工事水火災厄難
同工事従業者一同無事安全
鬼子母神前

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)

功徳ヲ以テ日蓮宗祖ノ御守護アルガ如クニ祖師堂主秋沢弁導師へ左ノ題目ニヨリ朝夕二回祈願念禱シテ災害

厄難無事安全ヲ乞ウテ居ラルル次第ナル。

以上述べタル所ハ殆んど徹底セヌ次第デスガ是ハ元來文筆ノ才能ナキモノノ申ス事ト思召サレ此ノ際茅屋モノタラシメ併セテ工事中ノ一祖師堂ヲシテ有意義ノ災禍ニ逢フセズシテ義奮

以テ財囊中ノ清キ一片ヲ御寄進セラレ御齎助ヲ賜ハテ用事ヲ切ニ希フモノニ御座候

大正六年三月吉日
一世話人ニ代リテ
飛鳥 基吉

(酒匂土器研究會)